

メールレター(60)

北国の遠い春

時折やって来る吹雪の間隔が遠くなり、青空の日がやや多くなりはじめてきました。気のせいか日も延びてきたようです。窓の外は、相変わらず、雪景色が広がっています。緑の若葉が茂り、カラフルな花が咲く春を心待ちにしている日々です。

コロナ規制で子供たちに会うこともなく、あっという間に一月が過ぎてしまいました。フランスに隔離されていた孫娘も1月半ばに帰国し、自宅に戻りました。フランスの建前と本音はいい加減なものです。コロナ検査で陽性が出たので2週間の自主隔離というだけで、適当にフランスの祖父母たちと外出し、その後のPCR検査は無く、そのまま飛行機に乗り、帰国の途につきました。カナダ入国でPCR検査はしたものの、結果は5日後といわれ、その後の知らせは無く、陰性なのかどうかは永遠にわからないようです。もっとも、自宅のあるニューブランズウィック州はコロナで非常事態宣言が1月に出され、孫娘は帰国して、そのまま、また家族全員で自主隔離になりました。孫たちはオンラインで授業、義理の息子はオンラインで講義をしているようです。苛立つわけでもなく、それなりに穏やかに田舎暮らししているようです。

義理の長男は、こうしたコロナ禍の中、南仏の旅を1週間ほど楽しみ、問題なく戻ってきました。その間、マダム田中は猫シッターに振り回され、ひたすら猫の奴隷となって面倒をみていました。朝から晩まで甘やかされ、楽しませてくれる猫バカンスに、猫は幸せなひと一時を過ごしたようでした。連れて帰る時の車の中での叫び声が、それは、それは大変だったようです。「フランスでは誰もコロナの話もしないし、いつも通りだよ。あー楽しかった。グルメも最高。」

フランス国営放送のニュース番組から流れてくるコロナヒステリーはいったいなんなのでしょう。か。

この義理の長男が、先日のこと、

「このごろ、部下たちや部下の家族のことも考えないといけないなあと思うんだ。コロナで疲れ切っているのが見えるんだ。髪はバサバサ、洋服はダラダラ、そんな様子でリモートで仕事をしているんだ。あーこれはいけない、と感じてるんだ。子供が生まれたばかりの部下はオムツ代がちゃんとあるんだろうか、なんて心配になったりするんだ。パパは大丈夫？困っていることない、健康はどう。」

「どうした風のふきまわし？」

「肩は痛くない？トレーニングしてる？」

「肩はいつも痛いし、トレーニングはやる気がなくてね。心配してくれてありがとう。」

呆気にとられるドリトル先生。あれほど、自分のこと以外は見えない、エゴイストの塊だった子の言うことだろうか？ドリトル先生の頭は記憶をたどって乱れるのでした。オミクロンがた

だ一つ良いことをしてくれたとすれば、この子の頭と心の変化でしょうか。思いやりが出てきたのです、42歳になって。

難産でコロナ禍で生まれた孫娘は(娘の娘)は、今月末には1歳になります。無事に育ち、すっかりお茶目な幼児の表情になってきました。ニコニコと明るい子です。今は、伝え歩きで家の中の大発見に忙しいようです。この孫の保育園のグループにも毎日1人ずつオミクロンが出て、今は3人だけになってしまったようです。娘は、いつ、自分の子供の番になるかとヒヤヒヤしています。

義理の長男の家の次女は10ヶ月となりました。2人の異母姉妹、2人の異父兄に囲まれてすくすくと逞しく育っています。10ヶ月でイタリア、フランス、ポルトガルの旅をこなしてきました。今月末に、家族全員7人でニューヨークに旅に出るようです。大型車を借りて、800キロの道を6～7時間運転し、「アメリカ文化の旅」にでるのだそうです。

子供はどんな環境であれ、親が暖かく見守る限りは育っていくものだとその逞しさに明るい光りを感じています。